

令和6年度 徳島県立徳島北高等学校 学校評価総括評価表

Ⅰ 徳島北高等学校のスクール・ミッション

英語教育をリードする学校として、ICTを活用し、コミュニケーション力を伸ばす授業や外国の人々と交流する「English Day」、「語学研修」などの体験活動を通して、国際社会に貢献する「グローバル人材」に必要な力を育成します。

2 スクール・ポリシー

- (1) 自ら課題を見だし、主体的に学びに向かう力を育成します。
- (2) 知識・技能を活用し、他者と協働して課題を解決する力を育成します。
- (3) 人権を尊重する豊かな心と異文化理解の精神を育成します。
- (4) 確かな英語力とコミュニケーション能力を育成します。(普通科)
- 豊かな英語力とコミュニケーション能力を育成します。(国際英語科)
- (5) 国際的視野を持ち、持続可能な社会の形成に貢献する力を育成します。

3 「学校目標」(今年度の重点目標)

- 「自分で考え、自分の意見を持ち、自分の言葉で表現できる生徒の育成」
- (1) 自ら課題を見だし、主体的に学びに向かう生徒を育成する。
 - (2) 知識・技能を活用し、課題解決等を通じて、新たな価値を創造しようとする生徒を育成する。
 - (3) 個性を認め合い、多様な人とコミュニケーションを図りながら、国際的視野を持った社会の担い手となる生徒を育成する。
 - (4) 指導と評価の一体化による授業改善をすすめ、個別最適・協働的な学びを推進する。

4 本年度の取組

＊ 総合評価：目標を大きく達成…A、概ね目標を達成…B、目標を達成できなかった…C

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評 価		次年度への課題と方策
Ⅰ 人権教育	①すべての教育活動を通じて実施 ②生徒・教職員が共に意識高揚	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	「人権委員会だより」については、人権委員に早い段階で記事となり得る明確な題材を与えることができなかった。人権講演会が講師入院により中止になったことで大きな題材の一つを失った。長島愛生園訪問のような人権委員会主催以外のイベントの記事をどのようなものにするか、また、生徒が十分に目を通すことができるよう、適切な発行回数と時期を検討する必要がある。 人権ホームルーム活動については、担任と人権委員が残した教材や実施記録を次年度に活用できるようにしているが、研究授業を伴う題材以外の際に事前検討の時間を十分にとれない時期があった。資料や実践方法を瞬時に提供できるよう、題材ごとに整理しておく必要がある。
		① 「人権意識が高まった」と答えた生徒の割合を85%以上にする。 ②-1 「人権委員会だより」を年間5回以上発行し、読んでいる生徒の割合を70%以上にする。 ②-2 教職員の校外における人権講演会や研修会の参加を一人1回以上にする。	① 「人権意識が高まった」と答えた生徒は、94%で評価指標を達成した。 ②-1 「人権委員会だより」を読んでいると答えた生徒のは、30%で評価指標を大幅に下回った ②-2 教職員の92%が校外における人権講演会や研修会に年1回以上参加した。	(評定) B	
		活動計画	活動計画の実施状況	(所見) 年間5回の人権ホームルーム活動では、多彩なテーマについて真剣に考え活動する生徒の姿から、他人事ではなく自分のこととして捉えようという思いが伝わってきた。また、1・2年の人権委員が中心となって夏季休業中に国立療養所長島愛生園を訪問し、事前学習や施設見学からハンセン病の問題について深く学び、その内容を北高祭人権展で展示したり、「人権委員会だより」の記事とすることで好評を得た。 夏季休業中の応神学園人権教育講演会には多くの教員が参加した。	
		① 人権ホームルーム活動や学校行事等で、自分の意見を発言し、他人の意見もしっかり聞くことができるなど、主体的に参加・体験させる。 ② 「人権委員会だより」を生徒主体で発行し、ホームルーム活動などを利用して、人権委員に記事を紹介させるなど生徒主体の活動を活発にする。また、Classiで全生徒に配信し生徒の読む機会を増やす。	① 人権ホームルーム活動においてペアやグループで学習したり、12月の中・高生等による人権交流集会に参加することで活発な意見交換ができ、主体的に取り組むことができた。 ② 年5回発行予定の「人権委員会だより」を年度後半に2回しか発行できなかった。長島愛生園訪問の報告記事においては、参加生徒の感想等を多くの保護者に閲覧いただいた。		
2 学習指導	①学習習慣の確立 ②主体的・対話的で深い学びに向け、指導と評価の一体化による授業改善 ③生徒一人1台端末の活用を促進して、個別最適・協働的な学びの推進	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	初期指導がその後の高校生活に大きな影響を与えるのは明らかで、担任や教科担任を中心に具体的にアドバイスを行う。また年間を通して個人面談を継続し、担任が具体的なアドバイスを行えるよう、面談で取り上げるべき項目を学年内で共有し、生徒に明示することが必要である。 Classiを活用した学習記録の入力では、継続的に声を掛け続け、生徒が自主的に記録できるように習慣化する必要がある。 授業で扱うべき内容と授業外で取
		①-1 平日の家庭学習(塾等での学習を含む)が1時間以上の生徒を90%以上にする。また、休日の家庭学習(塾等での学習を含む)が「(学年)+1」時間以上の生徒を80%以上にする。 ①-2 「午後9時までに家庭学習を始める」習慣が身についている生徒の割合を80%以上にする。 ①-3 家庭学習状況を把握するために、Classiの学	①-1 9月の第2回調査では、学習時間が1時間以上の生徒は、1年生85.6%(84.5%)、2年生80.3%(87.3%)、2時間以上は、1年生49.2%(60.2%)、3時間以上は、2年生19.7%(44.7%)であった。学習時間のさらなる確保が課題である(括弧内は休日の学習時間)。 ①-2 1年生57.8%、2年生45.1%で1・2年ともに目標を下回った。 ①-3 3学期始業式の時点で30人以上記録し	(評定) B	
				(所見) 各担任が生徒のことを理解し、細やかな声掛けを行うことができた。新課程の大学入試に対応していくために、今後は教科担当ともしっかりと連携し、組織的に指導に取り組んでいくことが必要である。 補習の出席率については個人差が目	

		習記録を毎日入力する生徒の割合を85%以上とする。 ②-1 「学校の授業内容は、自分の学力を高めることに役立っている」と回答した生徒の割合を80%以上にする。 ②-2 「予習や復習など家庭学習を毎日行っている」と回答した生徒の割合を70%以上にする。 ③ ICTを活用した教科指導を充実させるため、ICT関連の教職員研修を年間2回以上実施する。	ているクラスは全21クラス中、2クラスのみであり、達成できていない。 ②-1 1年生96.0%、2年生92.0%で達成できている。 ②-2 1・2年生55.0%で達成できていない。 ③ 情報セキュリティ研修とYouMark Personalの活用の研修を行った。	立つ。継続した個別の指導が学年全体で必要である。 生徒が自分で学習を継続することができるようホームルーム活動や授業の中で継続した指導が必要である。 受講した教員が他の教員と情報を共有していくことが今後も重要となる。	り組むべき学習課題を明確にし、家庭学習と授業の連動や授業を通しての学力の向上を生徒が実感できるように、さらなる授業研究や改善に努めることが大切である。また、生徒が自己の成果を確認できるようなテストを実施する必要がある。 教員対象の教科指導研修会などの情報収集と共有に努めるとともに、担当学年に関わらず教科・科目内で受講者を割り振るなど、積極的な参加を促進することが重要である。 また、Classiの活用については、他の機能を周知し利用を促すなど、活用の幅を広げ、効果的な活用としていく必要がある。
		活動計画	活動計画の実施状況		
		①-1・2 学習記録や生活実態調査を通して、現状の把握に努める。家庭学習が不足している生徒には担任が面談を実施し、原因の解明と改善を図り、具体的なアドバイスを行う。また進路説明会等で、家庭学習の現状とその重要性を保護者に認識してもらい、積極的なサポートを依頼する。 ①-3 家庭学習が不足している生徒には、その原因を分析し家庭学習時間が増加するようにサポートする。 ②-1 予習、授業、復習の学習スタイルを確立させ、課題や確認テストを実施し、授業内容の理解とその定着を図る。 ②-2 自己の学習活動の振り返りができる時間を設け自己反省することで、主体的な学びにつなげるようにする。 ②-3 教科指導研修会の情報を周知し、事後は教科会や資料の閲覧を通して情報の共有を図る。 ③ Classiの運用方法について研修を行い、生徒自身が効果的に学びの振り返りを行うことができる環境づくりに努めるとともに、生徒の学習状況に対する適切な支援に活かす。	①-1・2 生活記録や生活実態調査を実施した。個人面談の機会を重視し、生活記録を基に具体的な生活改善に関するアドバイスを担任が行った。また学年PTAでは現状の報告と改善を依頼し、家庭と学校が協力できる体制の構築に努めた。 ①-3 学年集会では補習の意義や進路意識の高揚について指導した。補習の欠席が目立つ生徒には、個人面談を実施し、担任や学年主任を中心に個別指導を継続した。 ②-1 授業外で生徒が取り組むべき学習課題を明確にし、授業に集中できる環境を構築するよう各教科で改善を重ねた。 ②-2 定期考査、実力テスト、模試の受験後は訂正ノートの作成を促すなど、教科担任を中心に生徒の主体的な学びにつなげた。 ②-3 Web形式での教科指導研修会が充実し、参加しやすい環境が整った。 ③ Classiの活用研修を行った。また、オンラインで実施された徳島県Classi活用事例報告会に6名の教員が参加した。学習記録を活用し定期考査期間の学習取り組み状況をグラフで可視化し生徒の振り返りの補助として活用した教員もいた。多くの教員がClassiの校内グループを活用し連絡やテスト問題の答案などの資料共有を行った。		
3 生徒指導	①挨拶の励行など基本的生活習慣の確立 ②生徒一人一人の実情に応じた支援とヘルメット着用等の安全教育を推進 ③社会の一員としての公共心の育成 ④いじめ等問題の未然防止、早期発見、早期解決 ⑤生徒の健康維持と疾病の予防	評価指標 ①-1 服装規程に反して、再点検指導となる生徒の割合を1%以内にする。 ①-2 遅刻者の数を昨年度より10%減少させる。 ①-3 教員による登校指導を月1回、生徒による「あいさつ運動」を学期に1回実施する。 ②-1 自転車交通事故件数を昨年度より減少させる。(昨年度39件) ②-2 自転車通学生のヘルメットの着用について督促する。 ③-1 学校安全の日の立哨指導や交通マナーアップキャンペーンを通して自転車の交通マナーの向上に努める。特に並進通行、ながら運転の防止に努める。 ③-2 携帯電話の安全な使い方についての講演会を年1回以上実施する。 ④-1 「いじめは人間として許されない」と全ての生徒に認識させる。	評価指標による達成度 ①-1 服装規定に反して再点検を実施したした生徒は0名(0%)であり、目標を達成できた。 ①-2 2学期末の状況で遅刻数14(2%)減少した。 ①-3 学校安全の日における登校指導は計画通りに実施できた。 ②-1 自転車交通事故数は27件であり、昨年度同時期より2件減少した。 ②-2 始業式、終業式、学年集会などで自転車のヘルメット着用を推進した。また、今年度は2回の交通安全教室を行いその中でヘルメット着用を呼びかけた。 ③-1 学年集会など機会あるごとに交通マナーについて注意喚起を促した。 ③-2 スマートフォン安全教室はdocomoよりZonで行った。 ④-1 いじめアンケートを学期ごとに行い、「いじめは人間として許されない」と100%の	総合評価 (評定) A (所見) 服装頭髪については、概ね良好であった。 継続した指導により、遅刻の数が昨年度より若干ではあるが減少した。 教員側の挨拶に、挨拶を返す生徒は多いが、元氣よく自発的に挨拶ができる生徒は少ないようである。 自転車の乗り方について啓発や指導を行ったが、事故件数はそれほど減少していない。幸い大きな事故は発生していないことが救いである。交通マナーについての苦情等は少なかった。 いじめのアンケートでは、ほとんどの生徒が良好な人間関係のもと学校生活が送れているようである。しかしながら、小さなトラブルは起こってお	次年度への課題と方策 服装頭髪について大きく乱れている生徒はいないが、スカートを折り込んでいる生徒を時折見かける。注意すれば素直に直す、その場しのぎの状態である。常日頃から清潔感ある身だしなみができるように連携・協力をはかる必要がある。 雨天時や早朝補習がない日に遅刻が増加する傾向がみられることが課題である。 ヘルメット着用の呼びかけを粘り強く継続していく必要がある。機会あるごとにヘルメット着用に向けての意識向上を図り、啓発を行うことが重要である。 ほとんどの生徒がスマートフォンを所持し、使用している。今までに起こっていなかったようなトラブルも発生し、その使用方法やトラブルなどの実態把握が難しく、正確につ

		④-2 生徒対象「いじめアンケート」を年間3回以上実施し、不安を抱えている生徒には関係教員と連携し、個別面談を実施する。 ⑤-1 定期健康診断の受診率を100%にする。 ⑤-2 「保健だより」を年間12回発行する。 ⑤-3 不登校傾向の生徒には、早めに対処する。 ⑤-4 特別な支援を必要とする生徒には、適切に対処する。	生徒が認識している。 ④-2 「学校は好ましい人間関係の構築のため学校行事やホームルーム活動・授業に真剣に取り組んでいる」と答えた生徒の割合が96%だった。 ⑤-1 定期健康診断のうち、内科・結核・心電図・尿検査の4項目について、受診率が100%となった。 ⑤-2 「保健だより」を年間12回発行した。 ⑤-3 不登校傾向の生徒には、スクールカウンセリングを勧めることや、特別支援委員会を開催することを通じて、個別に支援を行うことができた。 ⑤-4 特別な支援を必要とする生徒には、校内外の関係機関と連携し、適切に対応できた。	り、いじめに発展することがないように早期に面談等を行って解決している。 定期健康診断の受診率は、良好であり、来年度も継続できるように努めたい。また、不登校傾向の生徒は、増加傾向ではあるが、個別に支援ができたように思う。	かめていない。関係機関の協力を得ながら実態把握に努めなければならない。 「いじめ」による特別指導は2件、また生徒間の小さなトラブルがあった。いじめに発展しないように初期段階での面談等が必要である。 不登校傾向の生徒の支援について来年度も継続していく必要がある。
		活動計画	活動計画の実施状況		
		①-1 常日頃から清潔感のある制服の着こなしができるように、学年団と連携・協力をしながら常時指導を徹底する。 ①-2 投稿指導週間を実施するとともに、多遅刻生徒の指導を徹底する。 ①-3 生徒会や生活委員と協力しながら自発的な挨拶を喚起する。 ②-1 登校指導を月1回以上、警察署やPTAとの合同指導を年3回実施する。 ②-2 交通事故の状況について、職員・生徒・保護者の共通理解が図れるよう、情報を提供する。 ②-3 交通安全教室を実施する。 ③ 各関係機関と連携し、交通安全教室、スマホ安全教室を行い、自転車の交通マナー、情報社会におけるモラルを身につけさせる。 ④ 生徒の日常の言動と行動に注意を払い、不適切な場合はその都度指導する。また、生徒一人一人を尊重し、面談等を実施していじめ防止に取り組む。 ⑤-1 健康診断と事後措置の徹底を図り、生徒の健康状態の把握と疾病の早期発見・受診推奨に努める。 ⑤-2 保健だよりや生徒保健委員会活動・健康に関するホームルーム活動や講演・学校保健委員会等を通じて、生徒の健康課題に合った情報の提供や啓発を行う。 ⑤-3 相談室やカウンセラーを活用し、不登校傾向や悩みを持つ生徒や保護者の支援に努める。 ⑤-4 校内外の関係者と連携を図り、特別な支援を必要とする生徒への対応や支援を行う。	①-1 学期はじめの全体指導やクラス単位での点検を計画どおり実施、また廊下などでの常時指導により、極端に服装頭髮が乱れた生徒はいなかった。 ①-2 雨天時や早朝補習のない日に遅刻が増加している。 ①-3 生徒会や生活委員による挨拶運動を実施した。 ②-1 登校指導を警察やPTAの協力の下予定どおり実施した。 ②-3 交通安全教室を2回実施した。2回目については生活委員による生徒主体の交通安全教室を実施した。 ③ 交通安全教室、スマートフォン安全教室を予定どおり実施した。交通安全教室については予定より1回多く実施した。 ④ 学期ごとに面談週間を行い、生徒の悩みや生活を見直す機会を持つことができた。また、いじめアンケートなどによって、生徒間のトラブルを早期に発見、対応することができた。 ⑤-1 健康診断の事後指導として、個別に受診勧告や歯科保健指導を実施したことにより、生徒の健康状態の早期把握や受診推奨につながった。 ⑤-2 保健だよりを毎月発行した。また、保健・厚生委員が主体となり、熱中症や感染症予防の校内放送、健康課題に応じた保健ホームルーム活動を実施した。その内容は、学校保健委員会で報告する等、協議を行うとともに、ホームページ等での情報発信により、家庭との情報共有につなげた。 ⑤-3 スクールカウンセラーによる生徒・保護者・教員の相談（44件）により、悩みを持つ生徒や別室登校の生徒への支援を行った。 ⑤-4 聴覚に対して特別な支援が必要な生徒に対し、聴覚補助システムを活用し、関係機関との連絡・調整等に努めた。		
4 進路指導	①キャリア教育を推進し、主体的な進路選択に向けた支援の充実 ②生徒の能力（可能性）、適性、希望等を踏まえた進路指導	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	次年度への課題と方策
		①-1 1、2年次にオープンキャンパスや体験活動に参加した生徒、またWebや誌面での進路研究に各	①-1 全生徒（100%）が進路研究を行った。	（評定） B	オープンキャンパスについては、Web利用が増加し、実体験を基にし

		学期に1回以上取り組んだ生徒の割合を100%とする。 ①-2 ポートフォリオを利用し、校外外で取り組んだ活動の振り返りを行う生徒の割合を100%とする。 ②-1 2年次の9月の進路調査で、「進路目標が明確になっている」と回答した生徒の割合を100%とする。 ②-2 公務員セミナーや就職説明会などを通して自ら考える力を育て、就職を希望する生徒全員が進路を実現する。	①-2 紙媒体を利用して、100%の生徒がポートフォリオを作成し、活動の記録、振り返りを行った。 ②-1 9月に実施した進路調査では、2年生の100%の生徒が現時点で、進路目標が明確であると回答した。 ②-2 個別・全体指導を通じて情報提供や意見交換に努め、就職希望者はほとんど全員が就職内定した。	(所見) ホームルームや学年集会を通して進路研究の重要性を継続して指導した。オープンキャンパスについては、Web利用が主となり、大学のキャンパスの様子や学生の雰囲気をつかみづらく、具体的なイメージを抱きにくい状況が見られた。 時期を設定して活動の振り返りを行うことができた。今後はその利用方法を具体化し、進路選択に直結させる指導が必要である。 2年生2学期までに具体的な進路目標を設定することはできているが、安易な選択に陥っていないかなど、個人面談を継続して確認・指導する必要がある。 職業観・勤労観を十分に醸成して、就職することに対するイメージを生徒が具体的に描けるよう、個人面談および三者面談を継続する必要がある。また情報収集とその共有を継続し、望ましい選択を支援する必要がある。	た進路研究が困難な現状が見られる。限定的な進路研究ではなく、多方面に視野を広げることのできる機会を得られるよう、幅広い情報の提供と機会の確保を行うことが大切である。 3年間を通して、Classiのポートフォリオ機能を活用し、主体的な進路選択へ更に発展させられるよう、指導体制を拡充する必要がある。 進路ホームルームや個人面談をさらに充実させ、学年・時期に応じて求められる内容や課題を精選し、達成目標を明確にさせることが重要である。 就職を希望する者に対し、2年生後半から具体的なサポートをさらに拡充させる。特に、面談の機会を十分に確保し、生徒・保護者への情報提供や意向を確認する機会を継続して設ける必要がある。
		活動計画	活動計画の実施状況		
		①-1 あらゆる機会を通して「自分の生き方」を考えさせるとともに、体験活動や進路研究に関する情報の提供に努め、1・2年生の間に必ず1回以上取り組ませる。 ①-2 ポートフォリオの意義とその利用方法を周知し、振り返りと記録を徹底させる。 ②-1 生徒や保護者に進路情報を提供し、各自の進路目標を設定させ、その実現に向けて主体的に学習する態度を育成する。また「若楠」や「進路ニュース」、「創立記念日の卒業生の講演会」などを活用し、進路意識の高揚を図る。 ②-2 望ましい職業観、勤労観の育成に向け、公務員セミナーや就職説明会を通して職業理解を進め、働く意義を学ばせる。	①-1 Web利用やリモート配信で実施されるイベントの周知を行い、積極的な参加を促した。コロナ禍以前と比較し、多種多様な学部イベントへの参加が見受けられた。 ①-2 振り返りレポートの作成を通し、自己の取組を客観視できるよう促した。 ②-1 「若楠」、「進路ニュース」、「学年PTA資料」、「学年集会スライド」では、入試や進路情報を掲載し周知に努め、進路意識の高揚を図った。 ②-2 各種イベントを活用したり、生徒・保護者との情報の共有や面談を継続したりして、職業観や勤労観の醸成に努めた。		
5 特別活動	①部活動や生徒会活動の活発化を通じて、所属感・連帯感を強化 ②ホームルーム活動や学校行事を通じて、温かい人間関係を確立	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	次年度への課題と方策
		①-1 学校評価アンケートにおいて「学校行事に自主的・積極的に取り組むことができた」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ①-2 学校評価アンケートにおいて「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ②-1 学校評価アンケートにおいて「学校行事や部活動に友人や仲間と協力して取り組み、友好的な人間関係を築くことができた」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ②-2 学校評価アンケートにおいて「生徒は学校行事に自主的に取り組み、望ましい人間関係を構築できている」と回答した教員の割合が、80%以上である。	①-1 「学校行事に自主的・積極的に取り組むことができた」と回答した生徒が94%であり、目標を達成できた。 ①-2 「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」が91%であり、目標を達成できた。 ②-1 「あなたは、学校行事や部活動に友人や仲間と協力して取り組み、友好的な人間関係を築くことができた」が95%であり、目標を達成できた。 ②-2 「生徒は学校行事に自主的に取り組み、望ましい人間関係を構築できている」が100%であり、目標を達成できた。	(評定) B (所見) 学校行事は、新型コロナウイルス感染症流行前の状況に戻しての実施となった。北高祭は、文化祭・体育祭ともにより効率よく実施できるように配慮し、生徒の思い出に残るものが実施できた。 生徒会の活動も北高祭や、予餞会などの実施に際して、自主的・積極的な活動ができた。「学校行事や生徒会行事には生徒の意見が取り入れられている」と回答した生徒は昨年度よりも10%以上増加したが、さらに引き続き生徒全員が、自主的・積極的な活動に参加できるよう工夫したい。	生徒会の活動は各行事の実施に際して、自主的・積極的な活動ができていた。しかし、全校生徒全てが自主的・積極的な活動ができているかという点、そこまでは至っていない。 アンケートの「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」の結果は、「ややあてはまる」の意見を含め91%であるため、より中身を向上させる活動を増やしていきたい。生徒会と本年度中に話し合いを行い、職員会議にかけていく等で生徒の意見を取り入れ生徒自らが考え行動する機会を増やしていきたい。 各行事において、生徒や教員へのアンケート・意見などを参考にしながら、次年度に向けて生徒や教員の意見が反映されるよう、計画の段階から配慮していきたい。
		活動計画	活動計画の実施状況		
		①-1 生徒会役員が中心となり各行事計画をたて、全校生徒が自己の役割や責任を自覚し、生徒の意見ができるだけ計画に反映できるようにする。 ①-2 各行事の事前・事後にアンケートを実施し、生徒自身に自らの取組についての状況を把握させ、今後の活動に生かせるようにする。 ②-1 各ホームルームでの人間関係を深め、生徒会や部活動での学年の枠を超えた人間関係も構築し、豊かな心を育成する。 ②-2 ホームルーム担任や部活動顧問という立場で、生徒の人間関係をよく観察し適切な方向に導け	①-1 生徒会役員は、率先して各行事の実施に際して、自主的に活動することができた。全校生徒が自己の役割や責任を自覚し自主的に活動できるようにした。 ①-2 北高祭などの大きな行事に関しては、生徒や教員にアンケートを実施し、次年度に向けて、改善できるようにした。 ②-1 各ホームルームでの人間関係を深め、生徒会や部活動での学年の枠を超えた人間関係も構築し、豊かな心を育成できるようにした。 ②-2 ホームルーム担任や部活動顧問という立場で、生徒の人間関係をよく観察し適切な方		

		るようにする。	向に導けるようにした。		
6 国際理解教育	①豊かな国際感覚と英語コミュニケーション能力の育成 ②異文化理解、国際協調の精神の醸成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	次年度への課題と方策
		①② 異文化学習の機会を年間3回以上提供する。	①② 「海外語学研修（1年生国際英語科）」、「国内語学研修（1・2年生希望者）」、「JENESYS2024中国高校生との交流会」、「English Day」の4事業を実施した。	（評定） A	昨年度、「海外語学研修」が4年ぶりに復活し、本年度も引き続いて無事に実施することができた。次年度も国際英語科1年生を対象に、海外語学研修を実施する予定であり、引き続き準備や事前研修に注力する必要がある。また、1・2年生普通科を対象とした福島での「国内語学研修」についても、来年度引き続いて実施する予定であり、関係機関と協力しながら準備を進めていく必要がある。国際交流関係の行事についても実施し、さらなる充実を図っていきたい。
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見） 本年度は初めて普通科の1・2年生を対象に「国内語学研修」を実施したが、参加した生徒の満足度が高かったことから、来年度も引き続き実施をしたい。国際英語科1年生の海外語学研修においては、主に中国からオーストラリアへ留学している生徒への日本文化についての発表の場もあり、プレゼンテーション技術を高めることもできた。「JENESYS2024中国高校生との交流会」では、表面的な交流にとどまらず、国際社会における諸問題など様々な知識を背景にした意見交換を積極的に行うことができた。	
		① 外部より講師等を招いて、グローバルな視点に立った考え方を受容するとともに、発信の練習をする。 ②-1 海外からの留学生の受け入れや、県内に在留する外国人との交流を通して、異文化に対する理解を深める。 ②-2 1年生国際英語科を対象にオーストラリアでの語学研修や、普通科対象の「国内語学研修」を実施する。	① 「English Day」については、国際英語科1年生が日本文化について紹介したり、国際英語科2年生が、ALTの先生方とディベートをしたり、国際英語科3年生は、テーマに基づくディスカッションを行った。普通科1・2年生は、ALTの先生へのインタビューと聞き取った情報を活用したゲームを実施した。「JENESYS2024中国高校生との交流会」では、三味線体験やレクリエーション、SDGsに対する各国の取組についての意見交換を行った。「ASEAN教員団訪問」では、アジア8カ国の教員が授業に参加し生徒と社会的な課題について意見交換をした。 ②-1 長期留学生として2名（オーストラリア、ノルウェー）の生徒を受け入れ、1年生国際英語科で学校生活を送っている。また、短期留学生として、1名（モンゴル）の生徒を受け入れた。 ②-2 「国内語学研修」は8月に1年生の希望者33名が福島県のBritish Hillsにおいて、研修を受けた。「海外語学研修」は1年生40名が参加した。研修先は、オーストラリアクイーンズランドのUnion Institute of Lanugageであった。オーストラリアの歴史や文化を学ぶとともに、ホームステイをすることを通して、現地での生活についてより深く学ぶことができた。		
7 防災教育	①災害への対応能力・判断力・行動力の育成 ②自助・共助・公助の視点で、災害時に役立つ人材の育成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	次年度への課題と方策
		①-1 地震・津波及び地震・火災対応避難訓練をそれぞれ年1回早期に実施するとともに、想定外津波避難訓練も1回実施する。 ② 校内外で行われる防災関係の行事を案内し、環境・防災委員以外の生徒の参加も募る。防災士講習会参加者については、2名以上の新規防災士登録者を目指す。	①-1 計画どおり4月に地震・津波避難訓練を実施した。7月には地震・火災避難訓練を実施し、避難訓練だけでなく通報訓練や生徒を対象にした消火器訓練と起震車体験を行った。 ② 校外での防災関係のボランティアを募集し、多くの生徒が参加した。また、今年度の県の各校への募集人数が2名であり、防災委員だけで希望者が超えてしまった。今年度の新規合格者は3名であった。	（評定） B	各種の避難訓練に生徒一人一人が主体的に緊張感を持って取り組めるようにするために、来年度はあらかじめ日時を通知する避難訓練ではなく、日時を生徒に通知せず、無作為に訓練を行うことで、より実践的な避難訓練を実施したい。 また、教職員の防災意識の向上も必要である。本校は徳島市・北島町・藍住町の津波一時避難場所であり、徳島市の避難所に指定されているので、避難所設置のマニュアルや防災備品の一覧などの教職員の共通理解を図りたい。 その他にも、本校での地域住民による避難訓練の実施については、地域の自主防災会から要望があるため、避難経路や避難場所の確認等、無理のない範囲で取り組みたい。 さらに、本年度文化祭の環境・防
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見） 年間2回の避難訓練や起震車体験・消火訓練に多くの生徒が熱心に取り組み、実際に体験をすることで防災意識の向上につながった。 地震による津波や火災発生時の避難経路と避難場所の確認をすることが重要であり、実際に避難することで具体的に確認することができた。 文化祭や北島町防災訓練において、従来の課題研究の展示ではなく、災害に役立つロープワーク講習会を行うことで、防災委員の生徒が来場者にわかりやすく説明し、大変好評であった。 また、12月に行われた「防災クラブ交流会」では防災委員会を代表して委員長と副委員長が参加し、今年度の防	
		①-1 避難場所や避難経路・方法などを充分周知する。 ①-2 環境・防災委員会により、文化祭時に展示による啓発活動を行い、全校生徒の防災意識の向上を図る。	①-1 年度初めの地震・津波避難訓練と7月の地震・火災避難訓練により、避難場所や避難経路について周知徹底ができた。 ①-2 文化祭で掲示物の作成・展示を行うだけでなく、防災委員による「災害時に役立つロープワーク講習会」を実施した。多くの来場者があり、防災意識の高揚につながった。		

		② 校内での防災関係講習会を行う予定であり、また校外講習会は案内が届きしだい案内及び募集する。防災士講習も同様に環境・防災委員を中心に募集し、文化祭時に活動報告を行うことで、その成果を全校生徒と共有する。	② 今年度は８月に防災士会の方々を招いて、「災害時に役立つロープワーク講習会」を行った。その講習会で習得したロープの結び方を９月の文化祭と１１月の北島町防災訓練で来場者に指導することで、参加者の防災意識高揚に貢献した。また、１２月に行われた「防災クラブ交流会」に参加し、防災委員の活動内容を発表した。２月には３市町防災協議会を行い、徳島市・北島町・藍住町の防災担当者や各地域の自主防災会の代表者に来校していただき、災害時の対応を協議した。	災委員会の活動内容をスライドを使って発表を行った。 昨年に引き続いて２月に行った３市町防災協議会では、３市町の防災担当と自主防災会の代表者と、地震・津波が起こった際の対応について協議し、災害時の連携について具体的に協議した。	災展示において実施した災害時に役立つロープワーク講習会は、活動的で具体的な活動であったため、来場者に変好評であった。来年度も同様に活動的な防災展示を実施したい。
--	--	---	--	---	---

学校関係者の意見

- ・項目により学校評価アンケートの評価基準については、スクールポリシーとの関わりの中で、どのレベルまで学校として求めているかを明確に示しておく必要があるのではないか。例えば、「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」と回答した生徒の割合は多いが、どの程度であってはまると答えるのかは、個々の生徒によって違ってくるので、学校の求める基準を明確に示すべきである。
- ・それぞれの生徒が、３年間通って北高でよかったと実感できる学校づくりを期待している。それこそが学校の実存意義である。
- ・不登校の生徒が増える傾向にある中、他人に助けてと言える生徒を育ててほしい。そのためには、助けてと言える環境づくりが必要である。生徒には、助けを求めることに躊躇せずに、困ったときは他人を頼ってもらいたい。
- ・人権教育で同和問題を取り扱う時間は少なくなっているが、現状を考えると、同和問題の解決に取り組む必要性が高まるのではないかな。